

「落ち」がついた後、あの人たちは……

志村 良知

純文学とは波瀾万丈の冒険譚のエンドマークの後に始まる日常だそうである。落語国には「落ち」がついて只の人となり、日常の中でいったいどうなったのだろうと考えさせられる人たちがいる。

『明け烏』の若旦那時次郎。論語を片時も離さない堅物が、花魁浦里の手管に一晩でぐにゃぐにゃになつてしまい「居続け」と相成る。「固すぎます」と嘆いていたおとつあんは、源兵衛と太助に首尾を聞いたその場で正反対の心配を始め、たちまち勘当騒ぎになつていつたと思われる。

『湯屋番』の若旦那。勘当の身で居候していた棟梁の家でも持て余され、銭湯の釜焚きの奉公に出される。しかし、全く反省しておらず世の中をなめ切っている。ほどなく全ての保護者を失い、ついて回るのはお天道様だけとなり、吾妻橋の欄干に立つことになつたであろう。

『富久』の太鼓持ち久蔵。千両富が当たり、居ぬきで二百三十両の小間物屋を買い堅気に収まつたであろう。しかし、元々遊びの玄人で酒にだらしなく、手元には数百両あつて地味な商いの必要もない。身を持ち崩すのは必定である。岡惚れしている「万梅」の中居、お松さんをおかみさんに迎えられなければ救いは無い。

『素人鰻』の元旗本の「嬢」。鰻と格闘するお父上に深窓から白粉を提供するだけで姿は見せない。しかし、このままではお父上が周囲の食い物にされて没落し、最悪の運命が降りかかつてきそうである。うまく新興成金に見染められ奥方に収まり、一家を救つただろうか。

『茶の湯』の根岸の隠居の世話係の小僧定吉。隠居の目にかなうくらいなのだから利発で、将来はお店を背負つて立つ大番頭になれる素質の子に違いない。しかし、厳しい修行をしなければならぬ時期を隠居と面白おかしく「茶の湯」などしていたのでは将来は無い。ご隠居やお店を継いでいる若旦那は、親から預かつている定吉の人生設計についてあまりに無責任である。

他にもまだまだいる。落語国は業が深い。